

不如帰

映画文学人生論

原作：徳富蘆花 (1908) 「国民新聞」
参考：アリス・ベーコン『明治日本の女たち』
監督：土居通芳 (1958) 脚色：村山俊郎 小山一夫
出演：川島武男 和田桂之助 撮影：山中晋
妻浪子 高倉みゆき 音楽：江口夜詩
千々岩康彦 丹波哲郎

あああ、人間はなぜ死ぬのでしよう！
生きたいわ！ 千年も万年も生きたいわ！

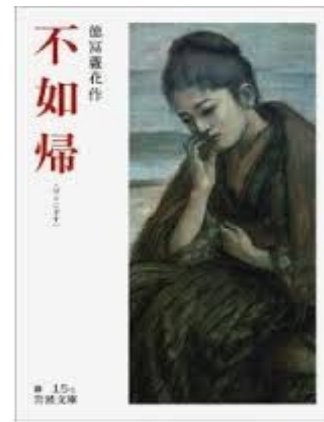
徳富蘆花原作『不如帰』は『金色夜叉』『婦系図』と並んで新派悲劇の代表的演目で、映画化も何度かされているが、私の生きた時代とは最盛期がずれているため、観たことがない。

ただ、「あああ、人間はなぜ死ぬのでしよう！生きたいわ！千年も万年も生きたいわ！」というヒロインのセリフは、『男はつらいよ』第十八作「寅次郎純情詩集」において旅役者一座が長野県上田市の別所温泉で上演するシーンと寅さんのマドンナ役京マチ子がいっしょの聞いたことがある。それを思いだしながら、蘆花の原作を読んでみた。上中下の三篇のうち下篇の冒頭は次の通り。

明治二十七年九月十六日午後九時、わが聯合艦隊は戦闘準備を整えて大同江口を発し、西北に向いて進みぬ。あたかも運送船を護して鴨緑江口に見えしという敵の艦隊を尋ね出して、雌雄を一戦に決せんとするなり。

吉野を旗艦として、高千穂、浪速、秋津州の第一遊撃隊、先鋒として前にあり。松島を旗艦として千代田、厳島、橋立、比叡、扶桑の本隊これに続き、砲艦赤城及軍見物と称する軍令部長を載せし西京丸またその後に従いつ。

これは日清戦争がまさに火蓋をきろうとしてい



不如帰——映画文学人生論

る雄壮な場面の描写である。明治維新政府がわずか二十七年で聯合艦隊を編成し、外国と戦争をするほどの戦力をつけたことになる。

ヒロインの浪子は海軍の片岡中将の娘だが、八歳のとき母と死に別れ、留学経験のある継母の繁子に西洋風をとり入れた教育で育てられる。やはり海軍の川島武男少尉に嫁ぐと、こんどは姑のお慶につかえなければならぬ。「西洋流の継母に鍛（きた）われて、今また昔風の姑に鍊（ね）られる」浪子は当時は不治の病の結核になり、夫の武男とは相思相愛なのに、姑の一存で離縁されると、読者の同情をかうようにつくられている。

つまり、『不如帰』は自然主義文学ではなく、浪漫主義の文学で、戦争小説、家庭小説、結核小説の要素をふくんでいる。

さらにモデル小説としても話題になった。片岡中将のモデルは陸軍大将大山巖、浪子は長女の信子、継母は大山捨松、川島武男は後に日銀総裁となった三島弥太郎とされているが、モデルと実在の人物とはまったく違うといってもよい。

大山巖は海軍中将ではなく、陸軍大将。三島弥太郎は日清戦争に参戦していない。長州の名ある士人の娘とされている継母大山捨松は会津藩家老山川氏の娘。離婚話を持ち込んだのは大山家のほうからだったという、事実は小説よりも奇なり。

不如帰人間はなぜ死ぬのでしょうか